

Title	中国目録学史上における子部の意義：六朝期目録の再検討
Sub Title	Significance of the 子部 (Zi Bu) in the history of Chinese bibliography
Author	金, 文京(Kim, Bunkyo)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1998
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.33 (1998.) ,p.171- 206
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000033-0171

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

中国目録学史における子部の意義

六朝期目録の再検討

金 文 京

一 目録学の効用

この十数年来、中国学をめぐるさまざまな状況に大きな変化が起っていることは、おそらくこの分野の研究に携る大多数の人々が感じていることであろう。もとより変化は将来の新しい学問のために必要であり、また必然でもある。しかし変化の過程で先人の久しい伝統の有益な側面が正しく継承されなければ、折角の先人の努力が無駄になるばかりでなく、新しい学問も偏った方向に行く虞れなしとしないであろう。そういう意味で最近気にかかることの一つは、目録学についての知識と関心が急速に低下しつつあるように感ぜられることである。

清の王鳴盛が「目録の学は学中第一の緊要の事」(『十七史商榷』卷一)と云うように、目録学は中国古典学にとつては、その基礎をなす重要な学問であり、以前はこれを知らずしては専門家とは見なされなかつたものである。私達が中国文学の勉強を始めたのは、今から四半世紀も前のことであるが、その頃はまだ古典の標点活字本はさほど多くなく、昔の木版本乃至はその影印本を利用する方が普通であった。たとえ標点本が有っても、専門家はそういうものは見ないものだという考えも、まだ相当に強かつた時代である。そこでいきおいある書物にはどういうテキス

トがあり、どのテキストが一番よいかを知るために『書目答問』や『四庫簡明目録標注』を見るようになり、自然に四部の分類を覚えたのである。こういう経験をしたのは、私などの世代がおそらくほとんど最後であろう。

その後、標点本が普及し、また各種索引類の整備により検索が容易になり、さらには古典に対する研究方法が多様化したなどの理由により、今では右の二書を参照する必要性は大きく減じたと言える。目録学などは過去の無用の長物であり、目録は単なる書物のリストに過ぎないと考える人が出てきても不思議はない。しかもこのような考えは、コンピューターの利用によりさらに強まった感がある。現に私は、コンピューターに入力すればどのうにでも検索できるのであるから、今さら分類などは不要だという意見を耳にしたことすらある。しかしちょっと待ってもらいたい。

なるほど目録とは書物を分類したリストに過ぎない。しかしまたそれは同時に、そうすることによって、ある時代ある社会の文化全体がどのような内容と体系をもっているのかを示してもいるのである。文化全般の内容と体系に對する明確な認識なくしては、分類は不可能であろう。早い話がたとえば、現代日本の文化状況をもっとも簡便に知ろうと思えば、図書館に行つて十進分類法を見るに如くはない。そして各項目にどのような本がどれだけあるかを見れば、およその傾向はつかめるであろう。

さらに図書分類に反映された文化体系は、当然ながら時代や地域によって異なるものである。近代と近代以前、中世の間には変化があり、またヨーロッパ、イスラム文化圏、中国文化圏では各々異質の体系がある。したがってそれらの図書分類を比較対照すれば、背景にある文化の歴史的変遷や異文化地域間の相違が分るはずであろう。コンピューターがいかに発達した時代であろうと、文化体系の歴史的変遷や異文化間の認識の相違は重要な問題であ

るはずであり、それを知るためには目録学は依然として必要な学問である。分類は単に検索の便のためのみ存在するのではない。コンピュータによる検索が至便となった今日、分類目録のもつこのような文化史、學術上の意義は、より明確になったとも言えるであろう。

西洋の図書分類がどちらかと言えば検索の便宜を主目的として発展してきた（アメリカ流の今日の図書館情報学はその延長線上にある）のに対して、中国の目録学はその当初より右のような文化史的、學術的な意図を濃厚にもった学問であった。そのことは「漢書芸文志」「隋書經籍志」「四庫提要」など、みな書物を分類するだけでなく、各項目にまずその分野の源流と歴史的変遷を説いた文章を冠しているのを見れば明らかであろう。目録学はまさに文化学術史そのものであり、「学中第一の緊要事」と称される所以もそこにこそある。

今仮りにある人が唐代のある書物を研究するとしよう。そのためにはまずその書物の内容、著者、時代背景などについて調べる必要があるろう。と同時にその書物が時代全体の文化体系の中で、あるいはその後の時代の文化体系において、どのような位相を占めているのかを知ることが重要である。位相が明らかでなければ、折角調べた内容などについての情報を正しく定位することができない。たとえば茶道の元祖として多くのひとが注目する唐の陸羽の『茶経』は、「新唐書芸文志」では「小説家類」、宋代の『郡齋讀書志』や「宋史芸文志」では「農家類」、『直齋書録解題』では「雜芸類」、「四庫全書」では「譜録類」に分類されている。このことを知らずに『茶経』という書物の性格やその読まれ方を考えるとすれば、客観的な結論を得ることは難しいであろう。目録学の知識なしに古典を研究するのは、いわば海図なしに航海に出るようなものであるといっても決して過言ではないのである。

しかし今日、目録学が顧られなくなったについては、学問をめぐる状況や学者の意識の変化にだけではなく、目

録学自身にもそれ相応の責任があると思える。目録学には、どうもすでに完成されてしまった、権威主義的で硬直した学問というイメージがある。また関係の深い版本学、書誌学からの連想であろう、骨董書画の鑑定のような好事家の趣味的、高踏的な学問であるという印象があることも否めない。したがってなにか新しい研究をやるうとする人から見れば、今さら古色蒼然とした目録学などをついても、何も面白そうなものは出て来ないだろうということになる。しかしこれまた大きな誤解なのであって、目録学は決して一部で考えられているような出来上ってしまった学問ではない。

以下、右のことがらを説明するために二つのことを述べてみたいと思う。一つは、「隋書経籍志」以来、「経・史・子・集」の四部分類が不変の分類原理として定着したと考えられがちであるが、それは誤りだということ、もう一つは、これに関連して子部の書物、もしくは子部の分類上の意義を再検討する必要があるということである。まず後者から話を始めてみよう。

なお目録学の歴史、概略については、余嘉錫『目録学發微』、汪辟疆『目録学研究』、姚名達『中国目録学史』、王重民『中国目録学史論集』、内藤湖南『支那目録学』、倉石武四郎『目録学』、清水茂『中国目録学』などのすぐれた著作がすでにあるので、それらを参照されたい。

二 分類上の子部の地位

よく知られるように、中国の古典書籍は「経史子集」の四部に分類されるのがふつうである。このうち経部は儒教の經典、史部は歴史、集部は文学とはつきりしているが、子部はそう簡単に定義することが困難で、不明瞭な印

象をあたえているであろう。さらにその細目を、たとえば「四庫全書」によって見ると、

儒家・兵家・法家・農家・医家・天文算法・術数・芸術・譜録・雑家・類書・小説家・釈家・道家

となっており、哲学あり、宗教あり、医学、技術あり、芸術、小説まであって、はなはだ雑駁としている。子部が簡単明瞭に定義できないのは、この雑駁さのためであるにちがいない。そのためか子部は他の三部にくらべてどことなく印象が薄く、敬遠もしくは軽視されがちであるように思える。中国学研究はふつう文史哲の三分野にわけられるが、子部の大半の書物がそのどれにも含まれないことは、その間の事情を物語っていよう。

しかし少しく考えてみればすぐに気が付くことであるが、四部の中でその基礎となる重要な部門は、元来は子部であった。中国で最も古い目録は漢代の劉歆の『七略』を継承した「漢書藝文志」であるが、それはよく知られるように四部ではなく、

六芸略・諸子略・詩賦略・兵書略・術数略・方伎略

の六分類になっている（これに総説に当る「輯略」を加えたのが『七略』である）。この六分類法の最大の特徴は、のちの史部に相当する項目が独立しておらず、歴史書は六芸略（のちの経部）の「春秋類」に附されていることであろう。すなわち史部は経部から分離独立したものであって、経部を親とすればその子供であると言える。

ところでこの親に当る六芸略（経部）は、

易・書・詩・礼・楽・春秋・論語・孝経・小学

からなり、もとより儒教の經典及びそれに関連する書物であるが、次の諸子略の細目を見ると、

儒家・道家・陰陽家・法家・名家・墨家・從横家・雑家・農家・小説家

となっており、儒家が劈頭に挙げられている。これはどういうことであろうか。

右の細目を見れば分かることだが、諸子略は春秋戦国時代の諸子百家の流れを汲むものである。そして儒家は元来、諸子百家の中の一つに過ぎなかつた。ところが漢の武帝が儒家を国教と定め、「百家を罷黜し、六経を表章」した結果、儒家の格が上がり他の諸家とは区別されるようになったのである。六芸略がありながら諸子略にも儒家が置かれているのは、そのような歴史的経緯を反映しているよう。つまり六芸略（経部）は諸子略（のちの子部にすべて含まれる）から分離独立したものであり、経部は子部から見れば子供、さらにその経部から分れた史部は孫とすることになる。さらに詩賦略はすなわち後の集部であるが、詩の元祖は言うまでもなく『詩経』であり、これも六芸略から分れたもの、つまり諸子略から見ればやはり孫である。

このように子部は「子」というその名とは裏腹に、経部、史部、集部にとっては親であり、祖父であった。ただ子や孫がみな偉くなったので、その地位を譲り渡し、序列第三位に甘んじてなんとなく影が薄くなってしまったにすぎない。しかし子孫が独立した後、親である子部はそのままおとなしく隠居して年老いてしまったかという、決してなかなかそうではない。試みに先に挙げた「四庫全書」の子部の細目と諸子略の細目とを比較してみてもいい。項目に相当の出入りがあることが分るであろう。

まず諸子略にはない兵家・医家・天文術数が「四庫全書」の子部の方にあるのは、「漢書藝文志」では元来独立した項目であつた兵家・術数・方伎（医家）の三略が子部に吸収されてしまったためだが、それだけではない。芸術・譜録・類書などはみな後世、文化の發達と多様化によって新たに生まれた領域概念であり、また釈家すなわち仏教は言うまでもなく外来の宗教である。このような新興の文化概念や外来文化は、おおむねみな子部がこれを受

け負っている。そのため子部の細目の歴史的変化は他の三部に比べてきわめて大きいと言える。

他の三部でも、経部に経解類（『旧唐書経籍志』）、史部に史評類（『郡齋讀書志』）、あるいは集部に文史（詩文評）類（『崇文総目』）、楽曲（詞曲）類（『遂初堂書目』）など新しい項目が設けられ、また元来は子部の儒家であった『孟子』が経部に移され（『遂初堂書目』）、『隋書経籍志』史部の鬼神類（雑伝附）がその後はおおむね子部の小説家類に収められるなどの変化はあるが、子部のようなダイナミックな変化は見られず、しかも『孟子』や鬼神類の移籍のように、部門の変化は子部と関連していることが多い。経・史・集の三部は、子部に比べて相対的に安定した部門であると言えるであろう。

子部では雑芸（芸術）類、類書類（『新唐書芸文志』）、譜録類（『遂初堂書目』）などの新項目や、墨家・名家・縦横家が雑家に合流するなどの統廃合（『千頃堂書目』）が見られるばかりか、先に挙げた『茶経』の場合のように子部の中で属する類が頻繁に変わる例もあり、総じて変化が激しい。このことは、子部が他の三部に比べて社会や文化の変化をより敏感に反映していることをおそらくは物語っている。

一九三八年に出た『江蘇省立国学図書館図書総目』は、中国が西洋文明の衝激による未曾有の変化を経験したのちに、旧来の四部分類を沿用して編まれた最も大規模な書目であるが、ここでは社会文化の激変によって新增した工家・商業・交通・耶教（キリスト教）・回教・哲学・自然科学・社会科学などの項目すべてが子部の中に立てられているのである。

先に子部は親、経史集部は子孫であると述べたが、出世して偉くなった子や孫が世間の変化や外来の影響に無関心であったのに対して、年老いた親の方が却ってそれらに敏感に反応したと言えようか。あるいは偉くなった子孫

は時々親の家にやってきて、自分たちの要らない物を置き去り、必要な物を持って帰ったと言ってもよいかも知れない。つまり目録学が出来上ってしまった変化の乏しい学問のように見えたのは、実は経史集部ばかりを見て子部を等閑視していたせいであって、子部は決して完成された面白みのない分野ではなかったのである。偉くなった子孫にばかり気を取られて、その影に隠れた親を見落していたわけである。このことを確認して、次に目録学の歴史を子部の立場からもう一度、簡単に回顧してみよう。

三 六部分類と四部分類

(1) 六部から四部へ

秦の始皇帝の焚書坑儒は史上に名高いが、実際に焚書の対象となったのは、「詩書百家の語」であって、「医薬・卜筮・種樹の書」は対象外であった（「史記・秦始皇紀」）。医学・占術・農業などの実用的技術書は、日常生活に欠くことができなかつたためであろう。漢が天下を統一したのちもまず注意されたのはやはり実用書であつたようである。蕭何が法律、韓信が兵法、張蒼が暦法と度量衡、叔孫通が礼儀を各々定めた（「史記・太史公自序」というのはそれを指すであろう。このうち最も整理が早く進んだのは兵書であつたようである。「漢書藝文志」の兵家略は、張良と韓信が兵法を整理して百八十二家から三十五家を選定し、武帝の時、楊僕が「兵録」を編んだと述べる。社会の発展が戦争と軍事技術の進歩によってリードされてきたことは、洋の東西と古今を通しての争い難い歴史的眞実であろう。兵書の目録が他に先んじて編まれたのは、そのためであると思える。

書物全般にわたる整理作業が行われたのは前漢末の成帝の時であり、その責任者は劉向であつた。しかし劉向が

自ら整理したのは、経伝・諸子・詩賦のみであり、兵書は歩兵校尉の任宏、数術は太史令の尹咸、方伎は侍医の李柱国と各々その道の專家が任に当り、劉向はただそれらを再整理しただけであった（「漢書芸文志」）。今風に言うならば、理系のことは文系の人間には分らないということであろう。なお劉向はこの時、整理作業の成果を各書物の解題からなる『別録』にまとめたが、今日残る『別録』は、『戦国策』『管子』『晏子』『孫卿（荀子）』『韓非子』『列子』『鄧析』『説苑』など諸子関係のものばかりで、経書や詩賦についてのものは一つもないのはなぜであろうか。それはともかく、この劉向の仕事を子の劉歆が受けついで出来たのが『七略』であり、それをさらに継承したのがすなわち「漢書芸文志」であった。

すでに述べたようにそれは六分類法を取っているが、六芸・諸子・詩賦の三略が文系、兵書・術数・方伎の三略が理系と文理のバランスがとれている。あるいは諸子略の中に陰陽家、農家など理系に近いものがあるのを考えれば、理系がやや優勢と言えるかもしれない。これが当時の文化状況をおおむね正確に反映していることは、近年各地で相ついで発見された戦国秦漢時代の木簡竹簡の中に、日書や医書などの技術系の書物が大量に含まれ、研究者を驚かせていることから、十分に証明されうるであろう。

漢代のこの六分類は、その後の三国、南北朝の激動の時代を経る過程で四部分類に再編成され、唐初の「隋書経籍志」で定着して以来、四部が今日に至るまで用いられることになる。六分類から四分類への変化の内訳は、「漢書芸文志」のうち先に理系として挙げた兵書・術数・方伎の三つがすべて諸子に合併されて子部となり、六芸から歴史が独立して各々経部と史部になる、つまり三つ減って一つ増えたのであるから差し引きマイナス二で、六が四になったわけである。この変化の意味するところは要するに、歴史学の勃興と理系の技術的学問の衰退ということ

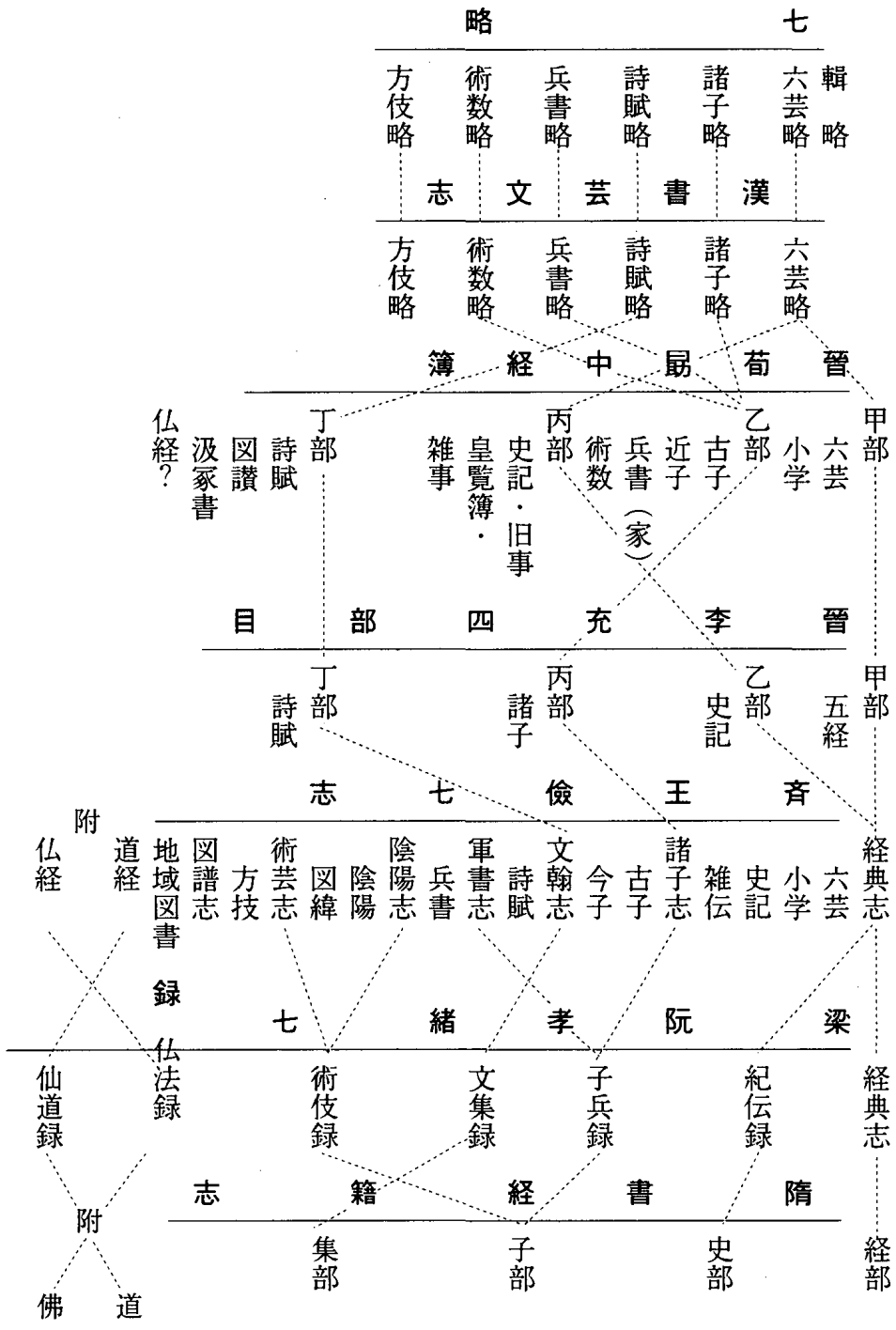
に尽きるであろう。これこそは三世紀から七世紀初頭までの四百年間に起った文化學術界の重大な変化であり、以後は經学、史学、文学、すなわち文史哲の偏重が中国文化の特色となって近代にまで至る。中国が西洋のような科学文明を生み出し得なかつた背景にある科学技術輕視の原点をここに見ることもできるであろう。

以上のような見方は、中国文化史の上ではすでに定説を通り越して常識にさえなつた感がある。しかしこのような見方は果して本当に正しいであろうか。あるいは大筋はそうであるにせよ、もう少し別の見方をする余地もあるのではあるまいか。この点を考えるため、次に六分類が四分類になるまでの過程をやや詳しく検討してみることしよう。まず梁阮孝緒の「七録序」（『広弘明集』卷三）及びそれを踏まえた「隋書經籍志」の記述によって、「漢書芸文志」と「隋書經籍志」の間に編まれた目録を列举してみよう。

- 1 『晋中經簿』四部 秘書監荀勗撰
- 2 『晋元帝書目』四部 著作郎李充撰
- 3 『晋義熙四年秘閣四部目録』 撰者不明
- 4 『宋元嘉八年秘閣四部目録』 秘書監謝靈運撰
- 5 『宋大四部目』 秘書丞殷淳撰
- 6 『宋元徽元年四部書目録』 秘書丞王儉撰
- 7 『今書七志』 王儉撰
- 8 『齊永明元年秘閣四部目録』 秘書丞王亮・秘書監謝朓撰
- 9 『梁天監四年文德正御四部及術數書目録』 学士劉孝標撰（術數は奉朝請祖暅撰）

- 10 『梁天監六年四部書目録』 秘書監任昉・秘書丞殷鈞撰
- 11 『七録』 梁処士阮孝緒撰

梁の後、陳隋二代にも宮廷の目録が数種あるが、ここでは省略する。次に主な目録の分類の変遷を表にしてみよう。



(2) 荀勗『晋中経簿』

ここでまず問題になるのは、初めて四部分類を採用した荀勗であろう。「七録序」「隋書経籍志」及び王隱『晋書』佚文（『初学記』卷十二）の記述を総合すると、荀勗は魏の秘書郎鄭默が作った『中経簿』を受けついたのであり、その目録はまた『中経新簿』ともよばれる。したがって四部分類は鄭默に始まる可能性もあろう。しかし『晋書』の荀勗伝に、「秘書監を領し、中書令の張華と劉向の別録に依り、記籍を整理す」とのみあるのをはじめ、荀勗がなぜまたどのようにして四部分類を採るに至ったかを述べる史料はない。いずれにせよ今日知られる最古の四部分類目録は荀勗の『晋中経（新）簿』である。

荀勗と張華はともに晋初を代表する文化人であり、かつ政府の要人であった。彼らの目録が当時の宮廷を中心とする文化界の状況を如実に反映したものであったことは、想像に難くないであろう。（ただし荀勗と張華は仲が悪かったようであるから、二人の協力がどの程度のものであったかは大いに疑問である）。荀勗が四部分類を採った背景としてまず考えられるのは、よく言われるように、後漢から三国にかけて多くの史書並びに史書の注釈が現れた結果、それらを『春秋』の附録とすることがもはや困難になったことであろう。史部の独立は時代の必然であった。そしてこの点は宮廷の図書館長である秘書監という彼の職務と密接にかかわっていたであろう。特に注目されるのは、彼がその職務として『汲冢書』を整理したことである。『晋書』の伝では、「汲冢中の古文竹書を得るに及び、勗に詔して之を撰次せしめ、以て中経となし秘書に列す」とある。この「中経」を、中華書局の標点本が書名とするのが正しいかどうか疑わしいが（荀勗の『穆天子伝』序では「蔵之中経」とあり、書名ではない）、それが『中経簿』と関係のあることは間違いないであろう。『中経簿』では『汲冢書』は丁部の詩賦・図讚の後に配さ

れているが（前表参照）、これはおそらく竹簡という素材の特殊性もあり、いわば別置された結果であって、性格的には丙部の史記（これは司馬遷の『史記』ではなく史書一般を指す）と同じである。『汲冢書』の一部をなす『穆天子伝』は荀勗の序文を冠している。

元来、秘書の職務は史書と関連が深い。たとえば漢末の秘書監で荀勗と同族の荀悦には『漢紀』の著があり、また晋初の泰始年間に秘書丞であった司馬彪は『九州春秋』『続漢書』を著した他、『汲冢書』によって譙周の『古史考』を補訂している。荀勗が秘書監として史書に多大の関心を寄せていたことは間違いないであろう。その上に『汲冢書』という世紀の大発見を自ら整理したことが直接の動機となつて、劉向以来の伝統的体例を改め、史部を独立させることになつたのではあるまいか。

荀勗の時代はまた建安文学に象徴されるように文学の革新期でもあつた。荀勗に文集の目録解題である『雜撰文章家集叙』及び『晋讌楽歌辞』の撰があるのは、彼のこの方面の素養を示すものであろう。このような歴史、文学に対する関心の深さに比べ（荀勗の孫の荀綽にも『晋後書』『百官表注』『古今五言詩美文』など文史方面の著作がある）、彼が諸子や兵医術数などの技術書に興味を示した形迹は全く見られない。『晋中経簿』の乙部は、「古諸子家・近世子家・兵書・兵家・術数」から成る（『隋書経籍志』）。兵書と兵家がどうちがうのか疑問だが、さらにかしいのは方伎（医）がないことである。もしこれが単なる脱誤でないとすれば、彼のこの方面への無関心、引いては技術系の書がすべて諸子に合併されてしまった背景を暗示するものであろう。

『晋中経簿』のもう一つの特徴は、仏典を収めていたことである。「七録序」の「古今書最」に、

晋中経簿四部書一千八百八十五部二万九百三十五卷、其中十六卷仏経、書簿少二卷、不詳所載多少。

とあることは、すでに姚名達が注意している。ただし「隋書經籍志」がこのことに触れないのはやや不審である。

(3) 秘閣四部目録

荀勗の『晋中經簿』の分類は、甲部(經)・乙部(子)・丙部(史)・丁部(集)で、子と史が今とは逆になっている。これを入替えて今と同じ順番にしたのは東晋初の李充『晋元帝書目』であった。これがその後永く定制となつたのであるが、ここに問題が三つある。

まず李充が目録を編んだのは永嘉の乱の直後で、書籍が散佚して少ししかない時であった。『晋中經簿』二万余巻に対し、『晋元帝書目』はわずか三千十四巻にすぎない。散佚した書物の内訳はむろん分らないが、先に述べたような秘書における文史偏重の傾向からすれば、子部特に技術書が多かつたことが想像される。臧栄緒『晋書』(『文選』卷四六注引)が李充の分類について、「五經を甲部、史記を乙部、諸子を丙部、詩賦を丁部」ともはや技術書に全然言及しないのもあるいはそのせいかも知れない。おそらくこれが史子逆転の直接の背景であつたらう。すなわちその後の定制となつたこの分類は、非常時におけるきわめて特殊な状況の産物であつた。

次に李充の目録は非常時の産物であるだけに、粗雑な出来であつたと考えられることである。充は遂に総て衆篇の名を没し、但だ甲乙を以て次と為す、自爾因循して変革する所無し。

という「隋書經籍志」(以下「隋志」と略)の記述は、この目録に対する否定的な評価を物語つていよう。そもそも李充が基づいた荀勗の『晋中經簿』でさえ、「作者の意に至つては論弁する所無し」(「隋志」と言われるように、各項目に解説を附した「漢書芸文志」に比べれば劣るものであつた。李充の目録はさらにそれ以下である。それはおそらく宮廷の秘閣の単なる排架目録に過ぎなかつたであろう。史子が逆転し、また史部が独立したのも、學術思

想上の理由と共に、『汲冢書』が別置されたのと同じような物理的要因が案外強く働いていたかも知れない。

最後に、李充の四部目録はその後の定制となったとはいえ、少なくとも六朝期の間は、それは秘書の目録に限られていたことを指摘せねばならない。臧榮緒『晋書』（前出）は、「秘閣以て永制と為す」と、この点を明確に述べている。そして事実、先の表に示した如く『晋中経簿』から『梁天監六年四部目録』まで、四部の目録はすべて秘書監・丞によって編まれた秘閣目録であった。この点は北朝も同じで、北魏の秘書丞盧昶の『甲乙新録』（『魏書』卷八四「孫惠蔚伝」）は、名前からして四部目録と思える。

ところで六朝は 門閥貴族の時代であったが、秘書の官は特に高級貴族の子弟が好んで就く役職であった（この点については王重民がすでに述べている）。そのため家柄がよいだけで無能な者が秘閣に入ることも多かったように、梁では

上車不落則著作、体中何如則秘書（『顔氏家訓・勸学篇』、「隋志」史部後序）

すなわち「車に乗って落ちなければ著作部、お体いかがと書けたら秘書郎」という諺さえできた。これでは立派な目録はできない。むろん任昉のような大学者が秘書監になった例がないではないが、おそらく属僚まかせの単なる在庫排架目録も少なくなかったであろう。「因循して変革する所無し」とは、そのことを指すと思える。

(4) 王儉『七志』

秘書の目録がみな四部分類であったのに対して、それ以外の目録は別の分類を採っていた。その代表は王儉の『七志』と阮孝緒の『七録』である。従来この二つの目録、特に前者については、劉歆の『七略』をまね、復古的な考えから数合せをしたにすぎない、時代の流れに逆行するものとの評価が大勢であったように思う。しかしはた

してそうであろうか。

まず王儉については、彼が秘書丞として四部目録を出しているにもかかわらず、それとは別に『七志』があることが問題であろう。『南齊書』卷二三、『南史』卷二二の彼の伝によれば、名門に生まれた王儉は宋の明帝の駙馬となり、十八歳で秘書郎ついで秘書丞となった。門閥貴族が秘書の職に就いた典型的な例であろう。四部目録が出た元徽元年（四七三）に彼はまだ二十二歳にすぎない。いくら聡明博識でもこの若さで宮廷図書館の目録を仕上げるのは無理である。これはやはりお役所仕事に名前だけ連ねたと考える方が無難であろう。

一方の『七志』は皇帝に献上したものであるから、彼の個人的な撰述であるにちがいない。問題はその時期である。『宋書』卷九「後廢帝紀」は、それを元徽元年八月のこととする。そうすると彼は同じ年に官撰、私撰二つの目録を出したことになる。王重民はこれを不自然とし、『古今書録』序に

劉歆は七略を作り、王儉は七志を作るに、二紀を逾えて方めて就る。

とあるのを根拠に、元徽元年に出来たのは秘書の四部目録の方であって、『七志』は齊に入ってから永明三年（四八五）に王儉が国子祭酒となった時以後の作であろうという。伝によれば永明三年、宋以来学士達の学問所であった総明觀を廢し国学を置き、王儉を国子祭酒にすると共に、儉の家に学士館を開き、総明觀の四部書を充てた。なるほどそれならば彼がはじめて秘書郎になってから二十年近くのちである。学士館の協力によって編集したとするのも、また宋と齊で各々一部ずつ目録を作ったことになるのも共に合理的であろう。

王重民のこの説のために傍証を一つ挙げるならば、『隋志』が「宋元徽元年四部書目録四卷・今書七志七十卷」とするのに対し、『南史』『南齊書』の王儉伝が共に「七志四十卷」と記すのは、あるいは二つの目録を混同した結

果であるかも知れない。

次に『七志』がなぜ四ではなく七部分類になっているかについては、「隋志」が書名を「今書七志」とする点に手掛りがあるように思える。「今書」というのは、おそらく秘書の本が代々受け継がれてきた古典を主体としたのに対して、その当時の社会に行われていた「今の書物」を意味するであろう。つまり秘書の目録が排架目録であったのに対して、『七志』は当時の総目録を目指したものであったと考えられる。そして当時民間で読まれていた書物の中には、軍書（兵）、陰陽（術数）、術芸（方伎）等技術系の実用書が依然として高い比率を占めていたのではあるまいか。

「漢書芸文志」から「隋志」に至る間の各部門の書物の量的変化を調べてみると、これらの技術書が大幅に増加していることが分る。しかも技術書の特色は、古い本が淘汰され新著が次々に現れる新陳代謝の激しさにあった（この点については、興膳宏・川合康三著『隋書経籍志詳攷』解説に具体的数字を伴っての指摘がある）。また諸子についてもすでに『晋中経簿』の段階から古諸子と新諸子があったように、新旧の変化が大きかったことが窺われる。「今書」を対象とした『七志』としては当然それらの新しい書物を重視したのであるから、その状況を的確に反映させるには、四部分類は不適切であったはずである。王儉が七分類を採ったのはそのためであろう。

むろん『七略』に倣う気持もあつたであろうが、『七略』の六分類を無視して、図譜を独立させて七分類とし、さらに道仏二教を附録にして実質上は九分類になっているのは、やはり現実の状況からの要請によるものであつたと思える。また史書を独立させず『七略』に倣って「經典志」に合併させたのは一見逆行のようであるが、『七略』は『七略』のように史書を春秋に附したのではなく、「經典志」に六芸・小学の経部と史記・雜伝の史部を設けた

のであるから、『七略』とは同じでない。王儉は六朝の名門貴族としては異例に儒学を好み、特に三礼に明るく「尤も春秋を善く」したというから、あるいはその儒学及び經典偏重の態度が分類に反映されたのではあるまいか。『七志』は六芸の首に『孝経』を置くなど（『經典釈文』序録）、經典の順序にも独自の改変を行っている。史書を經書と同等に扱っている点は、これまでの評価とは逆に、史部尊重の現れと見ることも可能であろう。

ともあれ、『七志』は、王儉自身のものをも含めたそれまでの秘閣四部目録に比べて、格段に周到な目録であったはずである。そのことは秘書目録にはない解題が『七志』にはついていたことから知られるであろう。「隋志」は、

然れども亦た作者の意を述べず、但だ書名の下に毎べて一伝を立て、又た九篇の条例を作りて首卷の中に編む。文義淺近にして未だ典則とならず。

とこれをあまり高く評価しないが、しかしないよりはましなはずであろう。その佚文は『文選』李善注の中に七条見えている。

(5) 劉孝標・祖暉『梁天監四年文德正御五部目録』

これは官撰ではあるが秘書の目録ではない点が注目される。文德殿は武帝の日常生活の場であつたと考えられる。天監の初年、武帝はここに学士省を設け、身分の高下を問わず高才碩学の者を召して書籍を校定させた（『梁書』文学伝）。つまり秘書が官廷の公的な蔵書であり、その責任者がおおむね門閥貴族であつたのに対して、文德殿の図書は皇帝の私的な蔵書で（「正御」とはそういう意味であろう）、その整理に當つた学士達は、学識はあつたが必ずしも門閥貴族ではなかつたのである。

この文徳殿の蔵書も四部に分類されていたらしいが、目録は術数の部分のみ奉朝請の祖暅が作製したため、結果的に五部分類となった。祖暅は科学者として有名な祖沖之の子であり（『南史』卷七二「祖沖之伝」に附する祖暅之と同一人物）、天監初に父の『漏経』を修訂している。後に材官將軍となって水利工事に当り、また北魏の捕虜となつて「欵器漏刻銘」を作つた。（『梁書』卷十八「康絢伝」、卷三六「江革伝」）。技術書をその道の専家に委ねたのは劉向の場合と同じである。秘書では尊重されなかつた技術書の目録をわざわざ専家に作らせたのは、おそらく皇帝の私的な蔵書は單なる皇帝個人の趣味のためだけではなく、また実際の政策立案に利用されることがあつたからであろう。すなわち皇帝の個人的蔵書は民間の書物と共通する点があつたのである。

なお『七録』序は、

又た文徳殿内に別に衆書を蔵し、学士劉孝標等をして重ねて校を加え進めしむ

と言ひ、「隋志」も劉孝標撰とするが、このことは一考を要する。『梁書』卷五十、『南史』卷四九の「劉峻（孝標）伝」によると、彼は、

天監初、召されて西省に入り、学士賀蹤と秘書を典校

した。この「西省」は、文徳殿にあつた学士省を指すと思える。『陳書』の「高祖本紀」永定三年四月の条に、

詔して前代に依り西省学士を置き、兼ねて技術者を以つてこれに預らしむ

とある前代の「西省学士」とは学士省のことにちがいないからである。この記事からは逆に文徳殿に「技術者」がいたことが確かめられ、五部目録がそれに対応したものであることが分るであろう。したがつて、「秘書を典校」したと言つても、この「秘書」は普通名詞であつて、宮廷図書館である秘書省の意味に解すべきではない（『南史』

が「秘閣」とするのは誤りであろう。そのことは、『梁書』卷二七「殷鈞伝」に彼が秘書丞の時のこととして、

敢して秘閣四部書を校定して更に目錄を為す。又た詔を受け西省の法書古迹を料検して別に品目を為す

とあるのからも明らかであろう。つまりこの文徳殿学士省（西省）の天監四年目錄は、秘書監任昉と秘書丞殷鈞の『天監元年四部目錄』とは全く別物である。『隋書經籍志詳攷』解説がこの両者を同一書のように言うのは（同書二六、七頁）誤りであろう。「七録序」の「古今書最」では、殷鈞の秘閣四部書は文徳殿より少ないのでその数を録さないと断っている。

また先引の「劉峻伝」で、劉孝標が学士の賀蹤と共に秘書を典校したというのも注目に値する。賀蹤の経歴は知らないが、彼は任昉が死んだ後、沈約と共にその家の書目を調べたとあるように（『梁書』卷十四「任昉伝」、書籍整理の専門家であつたらしい。「旧唐書經籍志」に、「今書七志七十卷、王儉撰・賀蹤補」、「新唐書芸文志」でも「王儉今書七志七十卷、賀蹤補注」とあるのを信じれば、彼はまた王儉の『七志』にも関係していたことになる。とすれば文徳殿の目錄は賀蹤を介して『七志』の影響を受けていたことも考えられるであろう。術数の重視も『七志』に倣ったのかも知れない。劉孝標は西省に召されたものの、その人付き合ひの悪さが災して武帝に嫌われ、任用されなかった。つまり彼が本当に学士であつたかどうかはやや疑わしいのであつて、間違いなく学士だったのは賀蹤の方である。目錄も賀蹤が主体となつて作つたと考えの方がより自然であろう。ちなみに「新旧唐書」では共に丘賓卿を撰者とするが、何人か不明である。

(6) 阮孝緒『七録』

六朝時代に作られた目錄の中で最も完備したものが『七録』であることについては異論がないであろう。従来そ

の分類については、七部分類でありながらその経典・紀伝・子兵・文集の四録は四部分類と同じであり、七部と四部の折衷もしくは四部の一バリエーションとの見方が有力であった。しかし術伎録（「隋志」は「技術録」とする）を独立させている点や単なる「子」ではなく「子兵」であることを考えれば、これが秘書の四部目録ではなく、『七志』や『文徳殿五部目録』の系統に連なることは明らかであろう。事実、『七録』の前五録（内篇）は文徳殿の五部と、後二録（外篇）は『七志』の附録と一致する（ただし道仏の順序が逆になる）。「七録序」は各部門の名称について一々『七志』を引合いに出しているし、また『史通』の「点煩篇」に

阮孝緒七録に、書の文徳殿に有る者は丹筆もて其の字を写す

とあるのも、両者の『七録』への影響を物語るものにはかならない。

阮孝緒は一生官に仕えようとせず民間の処士を以て終った人物である。任昉がその兄を訪ねた時にも会おうとせず、また秘書監の傅昭の推薦にも赴こうとしなかった（『広弘明集』卷三）。任昉が彼について、「趣舎苟しくも異なれば、何ぞ相干すを用いん」と評したと言うように、秘書監などの高官とは一線を画していたようである。一方彼が交際した人物として知れるのは、裴子野と劉杳であるが、この二人は共に秘書監の属官である著作郎であった。裴子野は任昉と親戚であるにもかかわらず不仲であったし（『梁書』卷三十）、劉杳は任昉を驚かすほどの博識を以て知られた（『梁書』卷五十）。「七録序」によると劉杳は『七録』の編集にも協力したらしいが、劉杳には別に「古今四部書目五卷」の著があった。五巻というのはあるいは術数を含むのであろうか。

阮孝緒はその畢生の力を挙げて文献を搜集し、公私の目録を広く参照して『七録』を完成させた。それは王儉の『七志』が当時存在した「今書」を対象としたのに比べてさらに範囲を広げ、当時すでに亡佚した書物をも網羅し

たより一層総合的な目録であった。この点は劉杳の『古今四部書目』も同じであったろう。そして『七録』には『七志』よりさらに行き届いた各部門の解題がついていた。「隋志」の解題が『七録』の記述を踏まえたものであることは、「隋志」の総序と「七録序」を比較してみれば一目瞭然である。

以上によって見れば、阮孝緒の分類が周到に考えぬかれたものであることは明らかであろう。紀伝録すなわち史部を独立させたのは王儉『七志』の欠陥を正すものであり、『正史刪繁』『高隱伝』など史書の著述のある彼としては当然である。また術数と方伎を合併して「術伎録」としたのは、方伎の中の神仙、房中を「仙道録」の方に移したためであった。単に文徳殿の五部目録を真似ただけではない。七という数へのこだわりはやはり有ったであろうが、より重要なのは、阮孝緒の考える學術文化体系が四部分類では包括し切れないものであったという事実である。

(7) 六朝目録の二つの系統とその意味

以上、六朝期の代表的な目録についてやや詳しく検討を加えたが、それによって明らかになったのは、「漢書芸文志」から「隋書經籍志」までの変化を従来のように一直線上の流れと考えるのは誤りであって、そこに二つの異なる系統を認めるべきであるということであろう。すなわち秘書の目録とそれ以外の目録の二つである。

秘書目録の特徴は、

- (一) 秘書の在庫排架目録であること
- (二) 解題を伴わないこと
- (三) 四部分類で技術系実用書を重んじないこと
- (四) 撰者はおおむね上層の門閥貴族であること

となろう。王儉が駙馬であったことは先に述べたが、王亮、殷鈞もやはり駙馬であった。駙馬が秘書丞に就くのは当時の慣例であったかと思える。

次に秘書以外の目録とは、『七志』『梁文德殿五部目録』及び『七録』である（この他、隋の許善心『七林』もこの系統であるに相違ない）。その特徴は、

(一) 官撰の目録でないこと（『文德殿目録』も皇帝の私的目録である）

(二) 総合目録であること（『七志』『七録』）

(三) 五部または七分類で、技術系実用書を重視すること

(四) 撰者は、門閥貴族の変り者である王儉、在野の処士阮孝緒、皇帝に嫌われて野に下った劉孝標、技術者の祖暅と、要するに典型的な門閥貴族以外の者であること

である。

この両者の背景にある各々の文化的性格を一言で述べるならば、前者が六朝期の支配階級であった門閥貴族の文化を、後者がそうでない在野の文化を代表しているということになる。したがって六朝期を通じて六分類が四分類に変化し、中国の文化は文史偏重の特性をもつに至ったとする認識は修正を要する。むしろこの時期に中国の文化は、文史偏重、技術軽視の上層文化と技術をも重視する下層文化の二つに分裂したと考える方が事実に近い。

(8) 「隋書経籍志」

六朝の目録に二つの系統があったとすれば、その総決算である「隋志」が四部分類であることも、従来考えられたように当然とは言い難いであろう。事実、「隋志」はすでに見た如く歴代の秘書四部目録を評価せず、一方「七

志』『七録』については限定的ながらその価値を肯定している。しかも「隋志」の体例、記述には「七録」を襲った個所が少なくない。そこで注目されるのは許善心の『七林』である。

『隋書』卷五八の伝によれば、許善心は開皇十七年に秘書丞となったが、

時に秘藏の凶籍尚お淆乱多く、善心は阮孝緒の七録に放つて更に七林を製し、各々総序を為して篇首に冠し、又た部録の下、作者の意を明らかにし、其の類例を区分す。

とある。これは秘書丞によつて著された唯一の七分目録である。また右の記述によれば『七林』は、秘書の蔵書を主体としつつ『七録』のように他の目録を参照して佚書をも収録し、かつは各部門と各々の書物についての解題をも附したものであつたことが分る。すなわちそれは七分類であ点を別にすれば、「隋志」に最も近い目録であつたはずである。そこに『七録』↓『七林』↓『隋志』という流れが当然想定されうるであろう。

「隋志」を誰が執筆したかは明らかでないが、少なくとも唐初に秘書監の地位にあり凶書の整理に携つた魏徵、虞世南、顔師古などの意向がその体裁に強く影響しているであろうことは間違いない。「隋志」が『七林』を著録しないのは、あるいは唐初に王世充のところにあつた隋の宮廷の旧蔵書を長安に運ぶ際に起つた船の転覆事故によつて失われたのかも知れないが、『七林』の性格については『隋書』に記載があるぐらいであるから、魏徵たちは当然知つていたであろう。にもかかわらず「隋志」の総序が六朝以来の凶書の集散と歴代の目録について詳細に述べながら『七林』に全く言及しないのは不審であり、そこに何らかの事情が隠されているようにも疑われる。今となつてはそれを明らかにすることはもとより不可能であるが、少なくとも「隋志」が四部ではなく七分類を採用する選択肢も当時はあつたはずであろう。

そのような観点からもう一度「隋志」の記述を検討してみると、まず総序の最後に、

夫れ仁義礼智は国を治むる所以なり、方技数術は身を治むる所以なり、諸子は経籍の鼓吹たり、文章は乃ち政化の黼黻たり。

とあるのが注目される。史書についての言及がないのが不審であるが、これを素直に解釈すれば、方技数術は諸子とは別の分類でなければならぬ。事実、子部の後序では、

儒道より小説までは聖人の教なり、而して偏る所あり。兵より医方に及ぶまでは聖人の政なり、施す所各々異なる

と、諸子と兵・術数・医方を区別して述べている。このことは「隋志」の編纂をめぐる当時、四部とは異なる主張があつたことを暗示しているかも知れない。いずれにせよ「隋志」の四部分類は多分に表面的、形式的なものであつて、その内部には技術書を重んじる別の系統の分類が隠然として存在しているのである。すなわち「隋志」の四部分類は従来考えられていた程に確固たるものではないであろう。そしてそのことは、「隋志」以降の目録の分類法を見ることによつても、また確認されるはずである。

(9) 「隋志」以降の目録と子部

「隋志」以降の目録は、官撰もしくは正史の芸文・経籍志を見る限り、なるほどほとんど例外なしに四部分類にしたがっている。しかし一たび個人の蔵書目録に目を転ずれば、そうでないもののがかなりの数に達することが分るはずである。そして官撰目録がどちらかと言えば因襲的であるのに対して、個人の目録はその時々々の社会文化の変化をより多く反映している。次にその代表的なものを列挙しよう。

1 唐・呉兢『西齋目錄』、『日本国見在書目錄』、『玉海』

呉兢は盛唐の人、『開元群書四部録』の編集に参画した。しかし彼個人の目錄である『西齋目錄』は、『玉海』巻五二「藝文」によれば五十七部に分類されている。ということは四部であれ七分門であれ大部門に分けず子目だけであったということである。

ここで思い合わされるのは藤原佐世『日本国見在書目錄』であろう。この目錄は従来「隋志」の分類に忠実に従つたものとされてきたが、しかし肝心の經史子集の四部がなく、「易家」から「惣集家」まで四十の子目があるのみである。このような分類はおそらく当時の中国における『西齋目錄』のごとき分類の影響を受けたものであろう。

四部という規範的な分類が存在しないということは、先に述べた如く經史集の三部がすべて子部に由来する点から考えれば、総体としての子部化に他ならない。『日本国見在書目錄』がすべての子目に「家」をつけてよんでいるのは、まさにその現れであろう。「尚書家」「春秋家」など儒教經典を諸子百家並みに扱うのは尋常ではない。しかしおそらく唐代の民間ではそのような習慣があり、それが日本にも伝えられたと考えられる。南宋の王応麟『玉海』藝文類が四十四の子目から成るのもこの系統に属するであろう。

2 北宋・李淑『邯鄲圖書十志』

李淑は仁宗朝に秘書郎となり、官撰目錄である『崇文總目』の編纂に参加した（『宋史』卷二九一、『統資治通鑑長編』卷二四）。その個人目錄である『邯鄲圖書十志』は、四部の他、芸術志、道書志、書志、画志の八志五十七類に分類されていた（『邯鄲讀書志』卷九）。いずれか二つの志がさらに二分され十志となったのであろう。なお五十七類というのは『西齋目錄』と同じである。

ちなみに『崇文総目』は宮廷の蔵書目録であり、もとより四部分類であるが、その編集に加わった欧陽修は宮廷の図書について、

伏して以うに国家は悉く天下の書を聚め、上は文籍の初、六経伝記百家の説、翰林子墨の文章より、下は医卜禁咒神仙黄老浮图異域之言に至るまで、有らざる所靡し、号して書林と為す。（『上執政謝館職啓』「欧陽文忠公集」卷九五）

と言っている。ここで上下というのは時代の先後の意味であろうが、同時にまた価値的な評価をも意味するはずで、先に述べたような上層文化と下層文化の相違を説いたものと解釈することも可能であろう。すなわち医卜以下の「隋志」など四部分類では子部に合併された項目が、「六経伝記百家の説」とは位相が異なるとの認識が欧陽修にあったことを物語るものである。

3 南宋・鄭樵『通志』 芸文略、鄭寅『鄭氏書目』

鄭樵と『通志』については説明するまでもないであろう。その「芸文略」は阮孝緒の『七録』と同じく古今の書をすべて対象にしようとの意図のもとに編まれたものである。分類は、

経類・礼類・楽類・小学類・史類・諸子類・天文類・五行類・芸術類・医方類・類書類・文類

の十二の部門から成る。一見して明らかなように、諸子から類書に至る六類すなわち全体の半分が四部の子部に属するものであり、子部重視の姿勢が看取されよう。また礼・楽・小学の三類を経類から分離させたのは、それらの技術実用的な性格に着目したものであり、諸子から天文以下を独立させたのと同じ発想によると思える。

このような技術実用書の重視は、当時の民間における學術文化の実態を反映したものと見る事ができる。そし

てそれは『七録』などに反映された六朝期の文化体系と大きなちがいはなかったのである。このことは民間の下層文化の根強い継承性を物語るものであろう。なお鄭樵の族孫の鄭寅『鄭氏書目』は、經・史・子・芸・方技・文・類書の七部に分類されている。『直齋書録解題』はこれを「七録」と称している。

4元・莊蓼塘書目

陶宗儀『輟耕錄』卷二七に、

莊蓼塘は松江府上海県青龍鎮に住す、嘗て宋の秘書小史たり。其の家、書を蓄うこと数万卷、且つ手抄の者多し。經史子集、山經地志、医卜方技、稗官小説、具わざる所靡し。書目は甲乙を以て十門に分く。

とある。「山經地志」は風水書を指そう。「稗官小説」には白話のものをも含んだかも知れない。この書目は伝わらないが、右の記事を見る限り四部から技術書や小説が逸脱したものであったと考えられよう。

5明・楊士奇等『文淵閣書目』、張萱等『内閣藏書目録』

『文淵閣書目』は勅撰による宮廷藏書目録であるが、その分類はきわめて特異である。以下に列举しよう。

国朝（御製・勅撰）・易・書・詩・春秋・周礼・儀礼・礼記・礼書・樂書・諸經総類・四書・性理・經濟・附・史・史附・史雜・子書・子雜・雜附・文集・詩詞・類書・韻書・姓氏・法帖・画譜（諸譜附）・政書・刑書・兵法・算法・陰陽・医書・農圃・道書・仏書・古今志（雜志附）・旧志・新志

大項目を採らず子目のみなのは『西齋目録』以来の伝統を継いだものとも言えようが、その分類は、子書の後に

子雑がありさらに雑附があるというようにはなはだしく雑然としている。これはこの目録が千字文の号数を附した函架目録であることにもよるが、また同時に民間卑賤の出身であった明の皇室の雰囲気を反映していると考えられる。そしてそれは明代の學術文化の多様で雑然とした性格に対応しているのである。明初の一大類書として知られる『永楽大典』の編纂に際し、永楽帝は、

凡そ書契以来の經史子集、百家の書より天文、地志、陰陽、医卜、僧道、技芸の言に至るまで、備に輯めて一書となし浩繁を厭うなかれ

と述べたが（『明太宗実録』卷二〇）、この方針は『文淵閣書目』の雑然さと軌を一にするであろう。『永楽大典』が白話小説や戯曲を収めることは有名であるが、『文淵閣書目』も詩詞類の末尾に、「戯曲大全」「新詞小説」「煙粉靈怪」等を著録している。のち万暦年間の勅撰目録である『内閣藏書目録』の分類は、

聖製・典制・經・史・子・集・総集・類書・金石・図經・樂律・字学・理学・奏疏・伝記・技芸・志乘・雜
とやはり雑然としている。

6 明・晁琛、晁東呉『宝文堂書目』

晁氏父子は嘉靖年間の人である。『宝文堂書目』はその家藏書の目録であるが、分類は、

經・史・子・文集・類書・子雑・樂府・四六・經濟・挙業・韻書・政書・兵書・刑書・陰陽・医書・農圃・芸
圃・算法・図誌・年譜・姓氏・仏藏・道藏

の二十四項目からなる。一見して『文淵閣書目』との類似は明らかであろう。『文淵閣書目』もそうであったが、政書、刑書、年譜、図誌（地方志）など元来は史部にあった項目を分出させ、医書などの技術書の間配している

のは、政書などを過去の歴史記録としてではなく、その当時の政治に役立つ実用書と見なそうという態度の現れである。なお子雑に『三国志演義』『水滸伝』などの白話小説、楽府に『西廂記』をはじめとする戯曲作品を多く著録するのもこの目録の特色である。言うまでもなく白話小説や戯曲は、大雅の堂に登らざる俗書であり、ふつうの書目には採られない。

7 清・錢曾『也是園書目』

錢曾は明末清初の著名な文人、錢謙益の族曾孫で、その蔵書はもと錢謙益のものであった。この書目（『羅雪堂先生全集』三編十四冊収）は、

經部・史部・明史部・子部・集部・三藏・道藏・戯曲小説

の八部より成る。戯曲小説（むろん白話小説であり、文言小説は子部の小説に著録されている）を經史子集と並べて立項するのも異例であるが、さらにそれを

古今雜劇・曲譜・曲韻・說唱・伝奇・宋人詞話・通俗小説・偽書

に細分した点に特色がある。偽書が含まれるのは、戯曲小説はフィクションであるという意識の現れと解せよう。このように戯曲小説を一分類として独立させたのは、むろんこの方面の蔵書が豊富であったためであるが、それはまた明代後期以来の俗文学の盛行と、それに対する文人たちの積極的な関与を反映するものであった。なおこの書目のもう一つの特徴は、子部の細目がきわめて多いことであり、殊に医書は、

医書・医家経論・鍼灸・本草・方書・傷寒・風科・瘡腫・眼科・祝由科（「種痘法」を収める）・婦人・小児・

撰生・房中

と各専科ごとに細く分類している。これまた錢氏の蔵書独自の性格を物語ると共に、元明以来の医学の進歩をその背景としてもつてであろう。

8 清・孫星衍『孫氏祠堂書目』

孫星衍は乾隆五十二年の進士、錢大昕に教えを受けた清朝の代表的な考証学者の一人である。『孫氏祠堂書目』はその家蔵書の目録で（『木犀軒叢書』収）、分類は、

經学・小学・諸子・天文・地理・医律・史学・金石・類書・詞賦・書画・小説

の十二門に分かつ。小学、金石の別出や諸子を史学より前に置いた点に、考証学者としての眼光が感じられる。しかし最大の特徴は医律、すなわち医書と法律書を同じ項目で扱っている点であろう。孫氏の自序によればその理由は、両者共に「人を生かし人を殺すに關わる所甚だ重き」がためであるという。このような考えはきわめて独創的であるが、しかし前例がないわけではない。元代の法令集である『元典章』卷三二「医学科目」の項に、

世を為めるの切務は惟れ医と刑、医なる者は命を人に司り、刑なる者は教を世に弼く

と両者の社会的功用を並べて説いている。おそらくこのような思想が中国近世社会にはずっとあったのであろう。それは四部分類的発想からは生まれ得ない異質の思想である。その他、小説を最後に置くのは『也是園書目』に似るが、ただしこちらは文言小説のみで白話作品は含まない。それにしても『四庫全書』の完成からさほど隔たらぬ時期に、清朝の代表的考証学者の一人によって編まれた目録が、四部分類と全く異なる体系を採っていることは注目し値しよう。

以上、四部分類によらない目録の代表的なものを挙げたが、それらに共通する特色は子部、就中技術系の実用書

の重視とその立項にあると言えるであろう。その流れは唐代以降清代まで脈々と続いている。「隋志」より後は四部分類が定着したとするのは一面的な見方にすぎない。しかも四部分類自体においても、特に子部の性格はこの間に大きく変化しているのである。最後に四部分類の集大成とも言うべき「四庫全書」を例にそのことを述べよう。

9 「四庫全書」の子部

これまでの議論で明らかのように、子部の特徴の一つは、異質なものが混り合った雑駁さにある。そしてそれはおよそ四つの種類に分けることが可能であろう。

第一は「漢志」の諸子略であって、これが元来の子部の主体である。第二は「漢志」の兵書・術数・方伎の技術系実用書で、六分類が四分類になる過程で子部に編入された。第三は、外来の仏教とその刺激によって生まれた道教、すなわち宗教である。そして第四は類書や芸術・譜録など後世の文化の多様化によって生まれた新しい項目である。このことを念頭に置いて『四庫全書』の子部の細目をもう一度見てみよう。

儒家・兵家・法家・農家・医家・天文算法・術数・芸術・譜録・雑家・類書・小説家・釈家・道家

まず本来、子部の正統であるはずの諸子略十家のうち、陰陽・名・墨・従横の四家が消えていることに気が付くであろう。このうち陰陽家は実は早く「隋志」の段階でなくなっており、五行など元来の術数類に吸収された。残りの名・墨・従横の三家は、明代の『千頃堂書目』以来、数が少ないことを理由に雑家に編入された。さらに道家は元来、老荘の思想書であったのが、宗教の道教に合併され、そちらに重点が移っている。このように諸子略十家の半分が合併吸収を経て消えてしまったのである。その結果、十四の細目のうち元来の諸子略に由来するものは五、それ以外が九となっている。つまり本家であったはずの諸子が、居候や新参者、他所者に廂を貸して母屋を取られ

た格好であろう。このような子部の内実の変化が先に述べた技術系を重視する四部以外の分類の流れと連動したものであったことは言うまでもない。

四 子部の背景と意義―出版と小説を例として

以上、歴史的に見てあらゆる分類の母体は子部であり、またそれは時代と文化の発展を反映して変化してゆくこと、また「隋志」以来の四部分類は従来考えられて来た程には絶対的でないこと、そしてその背景には中国文化の上層と下層への分裂があることを述べてきた。ここで最後の点について若干の補足を行いたい。

子部及びそこから派生したその他の部門の原点は、春秋戦国の諸子百家にあると言える。そして諸子百家に共通する特色は、まずそれらが基本的に民間の学問であること（「漢志」がこれらをみな官職から出たとするのは議論の逆立ちであり、虚構にすぎない）、次にそれらがみな変動性に富むことである。変動性というのは、各学派が互いに影響し合つて変化し生滅して行くという意味と、思想家が各地を遊説しながら移動するという意味を兼ねている。漢代に儒学が国教として固定化した後も、その他の学派は依然として民間において活躍しつづけた。なるほど墨家や名家は学派としては消滅したが、その思想はさまざまに形を変えて生き残っている。それがつまり文化の二層化であり、四部以外の目録を生み続けた背景に他ならない。

現代中国語に「三教九流」という言葉がある。これはむろん儒仏道の三教と諸子略の小説家を除いた九流、すなわち子部を意味する語であったが、現代では雑多な職業、それも役人や学者などではなく、さまざまな職人や芸人、下級の医者や占師、場合によっては秘密結社や盗賊なども指す言葉として用いられ、そのため時に有象無象の胡

散臭い人間というニュアンスをも帯びる。彼らが構成する社会を一般に「江湖」と呼ぶが、この江湖的社会は中国の近世近代において重要な意味をもつことになるのである。「三教九流」という言葉には、民間における學術文化の伝統が象徴的に示されているよう。最後にその具体例として、出版と小説について簡単に触れよう。

中国における出版の起源が仏教を主とする宗教書と曆や字書など民間の営利出版物にあつたことは、敦煌資料などから見て疑問の余地がない。寺院の出版は信者からの募縁によるのであるから、やはり形を変えた営利出版である。そしてその後も出版の主流は一貫して民間の営利出版にあつたのであり、その営利出版の主体は実用書、すなわち主に子部の書であつた。従来、営利出版は南宋から盛んになるという認識があるが、『宋会要輯稿』（刑法二）に、営利出版に対する禁令がしばしば見えるように、北宋において営利出版はすでにこれまで考えられている以上に盛んであつたと思える。

ところが従来の版本学、書誌学では、所謂麻沙本に対する態度が典型的であるように、民間の営利出版物を軽視し、政府や著名な文人学者の非営利出版物を重んずる傾向が顕著であつた。そのため後者が出版の主流であるかのような錯覚さえあたえている。これは版本書誌学が校勘学と密接に結びついて、テキストの元来の形を復元し最良の正確なテキストを作成することを唯一の目的として来たためであつて、概して誤字が多くでたらめな営利出版物は重んぜられなかつたのである。宋元版偏重などもこのような態度の現れであろう。ただしこれも実は一つの錯覚であつて、学者文人の刊行物は本人が意を以て改めるため却つて誤ることがあるのに対して、営利出版物には無意識裏に古い形が保存されることが少なくない。

しかも政府や学者文人の刊行物、あるいは後世における宋元版などは、流通の面から見れば限られた範囲にしか

行き渡らず、大多数の人々が読んだのは質は悪くともやはり営利出版物であった。したがってもしその時代の文化や社会の実態を知ろうとするならば、むしろ営利出版物の方こそ重んぜられねばならないであろう。正確なテキストを校定することも重要だが、それだけでは時代や社会との連関が見失われ、書誌学はせまい学問にならざるを得ない。骨董趣味という誤解もその辺から生じてくる。営利出版物の重視は書誌学が自らの間口を広げ、他の関連する研究分野に貢献するための道を拓くであろう。そしてそこでは子部の書が重要な意味をもつものとして再評価されるはずである。

近世の民間営利出版の重要な一翼を任うのは白話小説である。小説は言うまでもなく文学であり、今では漢籍目錄でも集部に収められているが、もとはそうではなかった。すでに述べたように、明の『文淵閣書目』が詩詞の末尾に置いたような例外もないが、『宝文堂書目』は子雑に分類し、『也是園書目』は戯曲と共に別に立項している。あるいは歴史の一種と見なして、史部の野史類に入れた明の高儒『百川書志』のような例もある。そしてそもそも大多数の書目は、小説などは無視して著録しなかったのである。

このような状況に変化が訪れたのは言うまでもなく西洋文学の影響によるものであった。十九世紀末以降、小説は一躍文学の主座におどり出たと言つてよいであろう。しかし二十世紀に入ってできた目録でも、小説はおおむね子部に分類されている。たとえば一九一三年の『天津図書館書目』には子部に小説・通俗章回の属があり、また一九三三年の『江蘇省立国学図書館図書総目』でも子部の小説家類に平話・章回・彈詞・新体・訳述の項が設けられていて、新小説や翻訳小説までもが子部に著録されているのである。これは「漢志」以来の伝統に従ったものであると共に、西洋から小説尊重の観念が輸入された後も、小説は純粹の文学としてよりはむしろ社会改良のための実

用的手段として見られていたことを示唆するものであろう。管見に入った限りで小説を集部に置いた最初の例は、一九三八年『北京人文科学研究蔵書目録』で、集部の小説類に講史と小説を設けている。北京人文科学研究所は日本が作った機関であるから、これはおそらく日本からの影響であろう。同じく一九三八年（昭和十三年）に出た『東方文化学院京都研究所漢籍目録』は、集部の小説類に短篇小説・章回小説・目録叢刻の三つの属を置いている。その後の目録はおおむね集部に収めるが、『中国叢書綜目』のように依然として子部の小説に『全相平話』などを配する例がないわけではない。中国の小説を歴史的に研究しようとする時、このように小説か子部と見なされた事実を知らなければ、正確な理解は得がたいであろう。逆に知っていれば小説と類書、占書との関係など、文学的視点だけからは見えて来ない側面を発見できるはずである。中国文学研究の中では最も新しい分野である小説においてさえ、このように目録学的知識は必要かつ有益なのである。

以上まとまりのない話になったが、目録学は決して過去の遺物ではなく、依然として中国学必須の学問であり、かつまたそこには将来の新しい研究のためのヒントが隠されていることを理解して頂ければ幸いである。

（本稿は一九九五年の斯道文庫講演会における講演録をもとに増補したものである。）